

〈イギリス三枚舌外交〉

1917.11/2

バルフォア宣言

「我が大英帝国はパレスティナにユダヤ人のための『民族的郷土』を建設することに最善の努力を払うつもりです。」

あくまで「ナショナルホーム」と言っただけであって、「独立国家」なんてひとこと言っただけでね〜モンね!

ロスチャイルド男爵 第2代
ウォルター=ライオネル
ロスチャイルド
1915 - 1937

イギリス外相 第46代
アーサー=ジェームズ
バルフォア伯爵
1916.12/10 - 1919.10/23

共同統治

エジプト

シリア

レバノン

パレスティナ

ヨルダン

第1の書簡
ダマス
ベルシ
認める

第2の書簡
アラビアとその住民の独立を認めます。

第3の書簡
そんな
その境

第4の書簡
地中海沿岸地域はキリスト教徒も多いし、
純粋な「アラブ人地域」とは言えないかな。

第5の書簡
アナト
シリア
宗教と

第6の書簡
いやでも、その地域は我が同盟国フランスとの
調整もあるし、我が国の一存では如何とも…。
そのことについては追々ということ…。

第7の書簡
時間稼
こっち

第8の書簡
わ、わかりました。

往復書簡

フサイン=マクマホン協定

エジプト高等弁務官
アーサー=ヘンリー
マクマホン
1915 - 17

まあそのお〜…
いわゆる〜…
え〜と…

1916~17年

1916.5/16

サイクス=ピコ協定

北緯37度線

英仏勢力範囲線

英勢力範囲

英

イラク

イラン

クウェート

ベルシア湾

サウジアラビア

メッカ

オスマンから奪った領土を我々で山分けしようぜ! あんな蛮族どもとの約定なんざはなから無効だ!

それは構わんが、あんた、アラブとの約束があるだろう?

戦時内閣 中東顧問
タットン=ベンヴェヌート
マーク=サイクス
c.1916

仏外務省 外交官
フランソワ=マリ=ドニ
ジョルジュ=ピコ
c.1916

カス議定書通り、北緯37度線以南、ア以西のアラブ人地域に我々の独立をってことよいですな?

曖昧な言葉で誤魔化さないでいただきたい! 界について明言することを重ねて要求する!

リア半島南部はいいとして、以南は純粋なアラブだろうが! 民族は関係ないだろが!

ざしようとしてもそうはいかん! は如何なる修正も認めんからな!

メッカ太守
フサイン
イブン=アリー
1908 - 1915

第5章 オスマン帝国滅亡

第6章 エジプト・イランの再生

第7章 インドの独立運動

最終章 恐慌後のイスラーム

歴史を紐解くと、白人が「有色人種(黒人・黄人・赤人・青人^(* 01))」のことなど自分たちと“対等”だなどとは思っていない^(* 02)という本心が随所に現れてきます。

たとえば、彼らが「人間^{man}」と言ったとき、そこには有色人種が含まれていません^(* 03)し、A A 圏の領土の領有権を現地人のいないところで白人たちだけで勝手に取り決めます^(* 04)し、A A 圏で何か問題が起これば白人はかならず口を挟んでくるくせに、欧州で問題が起きても有色人種にはけっして口出しさせません。

果ては、本来であれば対等であるはずの「条約」や「協定」にまで彼らの人種差別意識が如実に現れ、彼らは条約相手と同じ白人であれば可能な限りこれを守ろうとしますが、相手が有色人種となると途端にこれを破ります。

しかしながら、破るにしても彼らなりの“正当性”が要りますから、そのため彼らはあらかじめ条文の中に“細工”を仕込んでおきます。

たとえば、敢えて何とでも解釈できる“曖昧な言葉”を織り交ぜておく。

たとえば、意図的に“誤訳”を仕込んでおく^(* 05)。

そうしておいて、あとからその部分に難癖をつけてこれを反故にします。

逆にいえば、条約文の中に“曖昧な言葉”や“誤訳”が紛れ込んでいるときは、白人はその条約を「守るつもりなど毛頭ない」ことを意味しています。

とはいえ、条約を根こそぎ御破算にしてしまうのでは元も子もないので、反故にするのはあくまで条約の「自分たちにとって都合の悪い部分」だけ。

「都合のよい部分」はあくまでも条約を盾にして相手に履行させようとし、これに相手が不満の声を上げればたちまち本性を現し、それまでの“営業スマイル”から“般若の形相”となって力でねじ伏せてくる。

欧米列強は19世紀いっぱいまでこのやり方で通して来ましたし、またそれでうまく行っていましたから、当然20世紀に入ってもこのやり方を貫こうとしま

(* 01) 五行思想(白・黒・黄・赤・青)に基づき、世界の人種を肌の色で5つに分けた呼び方。

- ・白人(ヨーロッパ人/コーカソイド)
- ・黒人(アフリカ人/ネグロイド)
- ・黄人(アジア人/モンゴロイド)
- ・赤人(アメリカ先住民/モンゴロイド)
- ・青人(オーストラリア先住民/オーストラロイド)。

す。

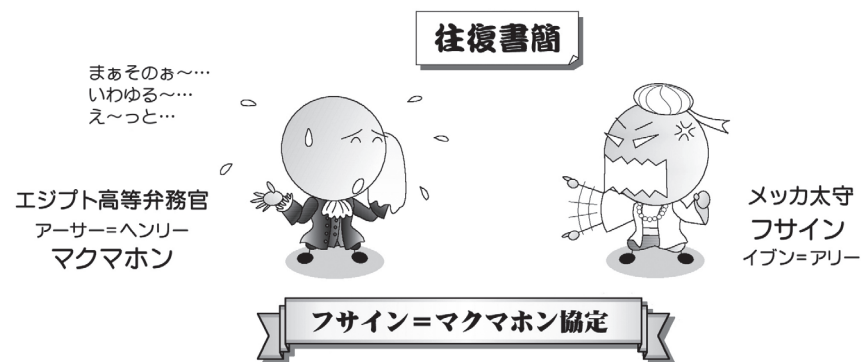
それこそが、前幕の「フサイン=マクマホン協定(D-2/3)」そして本幕の「サイクス=ピコ協定(A-5)」「バルフォア宣言(A-1)」です。

しかしながらイギリスにとって誤算だったのは、20世紀初頭に“ゲームチェンジ”が起っていたという事実です。

歴史の流れにおいて、「従来からの常識・ノウハウ・価値観・ルールなど、その時代を構成していた従来の枠組がごとごとく通用しなくなり、時代の様相がガラリと変わる」ことがあります。

これを“ゲームチェンジ^(* 06)”と言いますが、20世紀初頭はまさにこの“ゲームチェンジ”の節目に当たったのです。

すなわち“ゲームチェンジ”が起こったことで、ついこの間まで彼らを支え、輝きを与えてきた「19世紀」は見る間に色褪せ、これに代わって到来した「20世紀」は19世紀までの“帝国主義的手法”がまったく通用しない時代になっていったのでした。



(* 02) これはあくまでも「集団規範」を論じているのあって「個人規範」ではないことに留意。ここでは本旨から逸れてしまうため、これ以上詳しくは触れませんが。

(* 03) 詳しくは『世界史劇場 アメリカ合衆国の誕生』をご覧ください。

(* 04) 1494年の「トルデシリャス条約」、1885年の「ベルリン条約」など多数。

(* 05) 1854年の「日米和親条約」、1889年の「ウッチャリ条約」など多数。

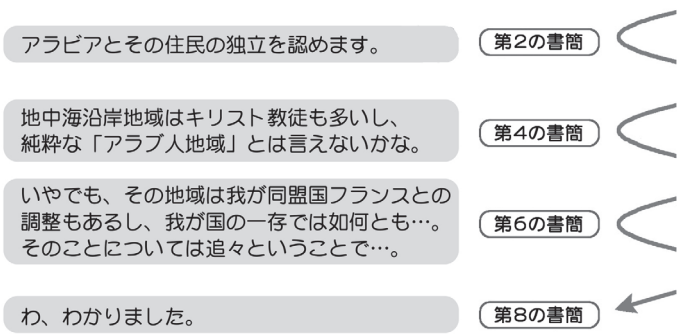
しかし、人は失敗して初めて“変化”に気づくのであって、当時はそんなことが起こっているなどとは夢にも思わず、イギリスは19世紀の定石通りに動きます。

前幕の「フサイン＝マクマホン協定」もそうして生まれたものです。

じつは、まだ第一次世界大戦が始まって間もない1915年、当時の英陸相 H. H. キッチナー卿がアラブ人を自陣営に取り込めんとメッカ太守フサインと交渉し、彼との間に『ダマスカス議定書』が成立していました。

- アラブ人はイギリスに味方してオスマン帝国に叛乱を起こすこと。
- その代わりにイギリスは「北は北緯37度(A-4)、東はイラン(B-5)国境、南はインド洋、西は地中海(A/B-2)・紅海(D-2/3)を境界線とする地域」にアラブ人の独立国家を認める。

しかし、その直後の1916年に当のキッチナー陸相が戦死してしまったため、議定書がウヤムヤにされることを恐れたフサインは、エジプト高等弁務官のマクマホンに確認の書簡(第1書簡)(C-3)を送り付けましたが、これが「フサイン＝マクマホン往復書簡(D-2/3)」の始まりとなります。



(* 06) もともとは経済用語でしたが、最近は歴史用語としても転用されるようになっていきます。「ゲームチェンジ」に関する詳細は、拙著『ゲームチェンジの世界史』(日本経済新聞出版)をご参照ください。

— 改めて確認しておきたいのですが、イギリス軍に戦争協力した暁には、戦後、間違いなく『ダマスカス議定書』の内容はそのまま守られるのでしょうか!?

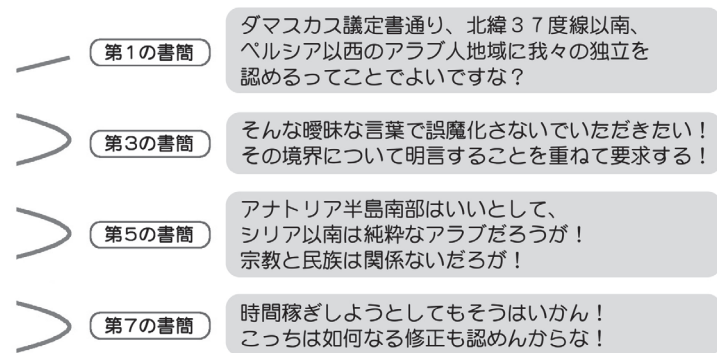
これに対するマクマホンの返信は、「我が国はアラビアとその住民の独立を望んでいます(第2書簡)(C-1/2)」という、答えにも何にもなっていないピント外れなもの。

“曖昧な言葉”で誤魔化そうとしていること自体、イギリスが「約束を守るつもりは毛頭ない」ことを如実に示しています(*07)。

しかし、フサインは引き下がらず、なおも強硬に「そんな曖昧な言葉ではなく、『議定書』で示された境界線を改めて明言するよう(第3書簡)(C-3)」要求すると、気圧されたマクマホンはつい本音を漏らします。

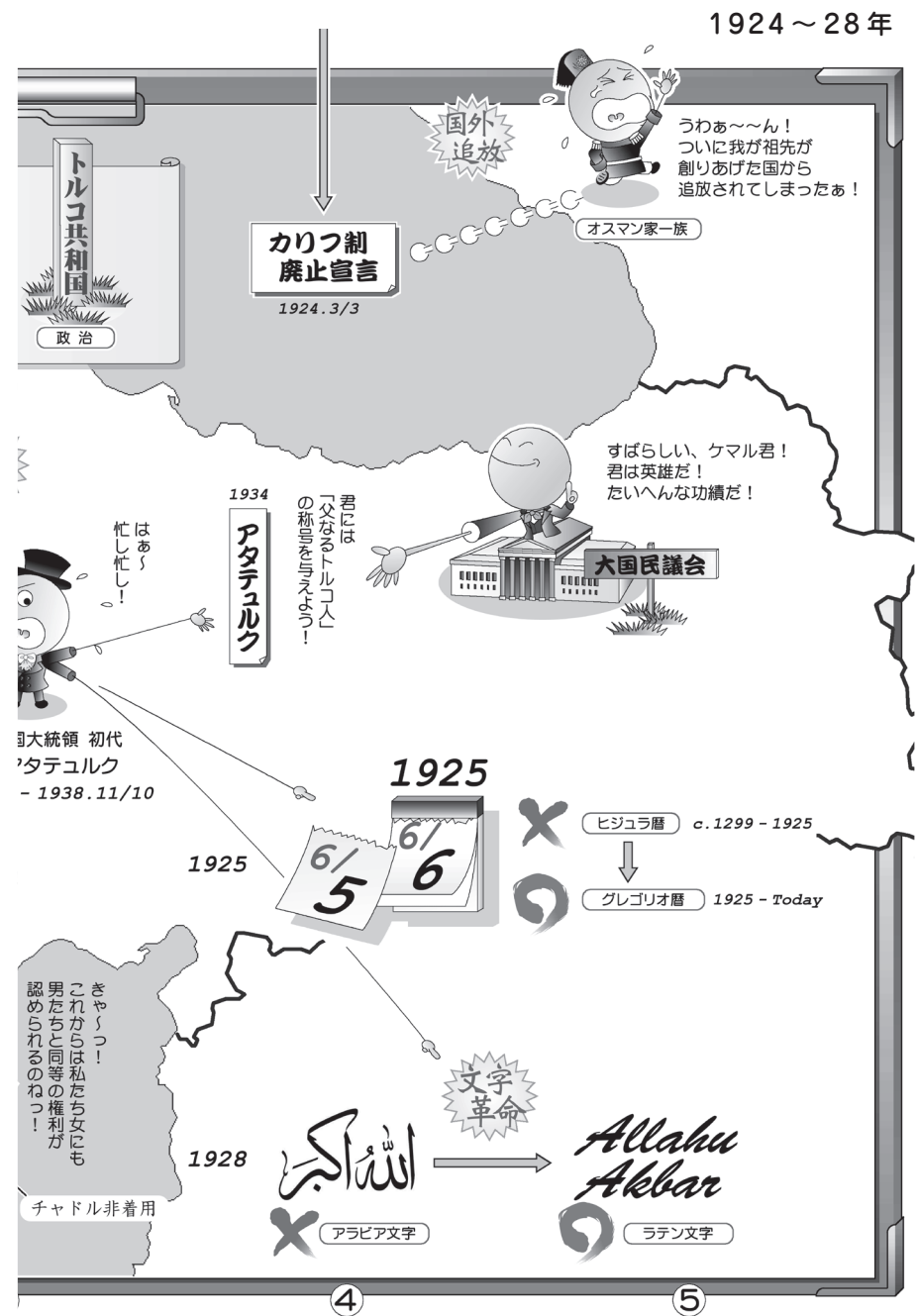
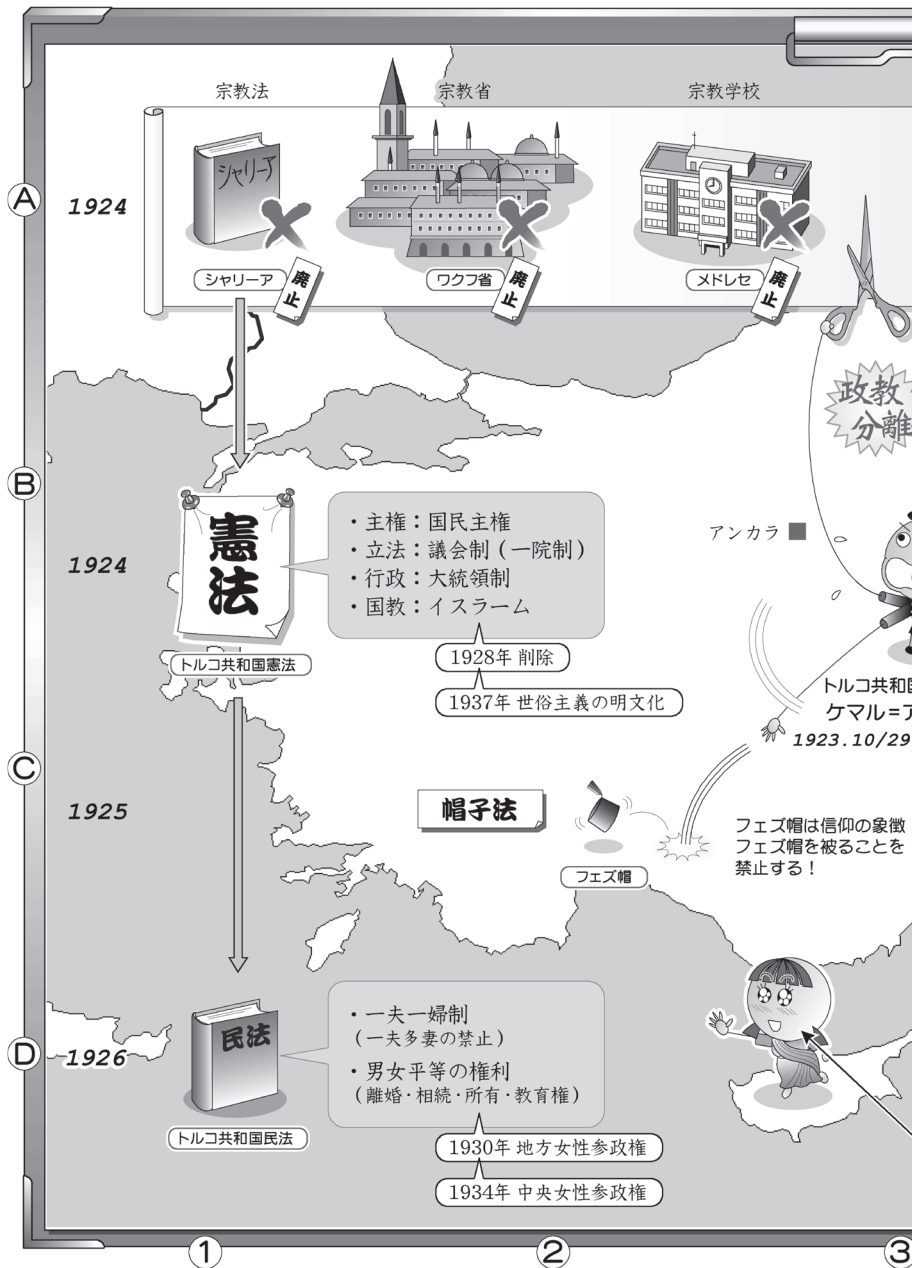
「とはいえ、地中海沿岸(A-2/3)はキリスト教徒が多いし、ここは「純粋なアラブ人地域」とは言えないかな。」(第4書簡)(C/D-1/2)これにフサインはブチ切れ。

— なんだ、それは!?! 約束が違うではないか!! 宗教と民族は関係ないだろうが!?



(* 07) じつはこのときすでに、イギリスはフランスと「オスマン帝国領分割協議」に入っており(これがのちの「サイクス＝ピコ協定」となって結実)、『ダマスカス議定書』を反故にするつもりでいました。

〈トルコ共和国の成立（トルコ革命）〉



第5章 オスマン帝国滅亡

第6章 エジプト・イランの再生

第7章 インドの独立運動

最終章 恐慌後のイスラーム

こうして、六百有余年の歴史を誇ったオスマン帝国もついに亡び、セーブル条約も破棄され、アンカラ政府はアナトリア半島とルメリア地方の「独立」を守り切ることができました。

これにより M.ケマルの人気は絶大となり、その勢いのままに彼は 1923 年「共和国宣言（前幕パネル D-4）」を行い、その初代大統領（B/C-3）に就任します（*01）。

これに対して、たとえ「帝国」はなくなったとしても「国家元首はあくまでもカリフたるべし！」とする保守勢力から猛反発を受け、ケマル＝パシャはこれを黙らせるため、翌 24 年、「カリフ制廃止宣言（A-4）」を発してオスマン家の血筋の者をひとり残らず国外追放（A-5）としました。

こうして 22 年の「スルタン制廃止宣言」、23 年の「共和国宣言」、24 年の「カリフ制廃止宣言」と連年発せられた 3 つの宣言によって、時代は一気に新時代へと舵をきっていきましたが、このあたりの動きは日本史の「幕末維新」にも似ていますから、これを比較しながら見ていくと理解しやすいかもしれません。

- ・旧政権：オスマン帝国 → 徳川幕府
- ・新政権：トルコ共和国 → 明治政府
- ・革命①：スルタン制廃止宣言 → 大政奉還
- ・革命②：共和国宣言 → 王政復古の大号令
- ・革命③：カリフ制廃止宣言 → 鳥羽・伏見の戦

言葉を加えて解説すると、「スルタン制廃止宣言（大政奉還）」によってオスマン帝国（徳川幕府）を倒し、「共和国宣言（王政復古の大号令）」を発して新政府（明治政府）を樹立してみたものの、いまだ帝国（幕府）の復権を画策する者が策動していたため、これにトドメを刺すべく、「カリフ制廃止宣言（鳥羽・伏

（*01）ナポレオン＝ボナパルトが、アミアンの和約（1802年）でイギリスを降し、ナポレオン法典（1804年）を制定したことで人気絶頂になった、その熱狂狂めやらぬうちに国民投票にかけて一気に「世襲皇帝」に就いてしまったときの動きに似ています。

（*02）（ ）内は日本史の動き。

（*03）この詳細については、前巻『侵蝕されるイスラーム世界』をご参照ください。

見の戦）」でオスマン家を追放した（江戸開城）（*02）」といった感じです。
——歴史は繰り返す。

さて、これで“オスマンの亡霊”を倒したとはいえ、これで終わりではありません。

むしろ、ここからが大変です。

オスマン帝国として、生き残りを賭けて何度も何度も改革や近代化を試みてきました（*03）。

“上からの近代化（*04）”だけでも、4度の近代化を試みながらことごとく失敗に終わり、ついに“下からの近代化（*05）”の時代に入って、「青年トルコ革命」を経て、最後は「トルコ革命」で滅亡に至りました。

オスマン帝国が夢にまで見、何度挑戦してもどうしてもうまく行かなかった近代化の“試練”を、新政府はどうやって乗り越えるのか。

これを乗り越えられなければ新政府とてすぐに亡ぶ運命であり、混迷の時代がつづくことになるでしょう。

ここでケマル＝パシャの“政治家としての力量”が試されます。

ところで、このころ（*06）のアジア諸国を見渡せば、オスマン帝国に限らずことごとく近代化に失敗していましたが、そうした中で唯一近代化に成功していたのは日本の「明治維新」だけでした。

そのためケマル＝パシャも「明治維新」を強く意識し、大統領執務室には彼が尊敬してやまない明治天皇の肖像画が掛けられていたといえます。

——これまで何度試みても失敗に終わった近代化だが、

日本人が成功させたのだから、

日本人と同祖（*07）である我々が成功できないはずがない！

そこで彼は大統領職に就くや、つぎつぎと大鉈を振るいはじめます。

彼の実行した改革は多岐にわたりますが、それらの共通点を挙げれば、「脱イ

（*04）政府中枢（君主・官僚など）が中心となって行われる近代化のこと。

「チューリップ時代」「セリムの新制」「マフムートの新制」「愚恵改革」の4つ。

（*05）下々の者（革命家・民など）が中心となって行われる近代化のこと。

（*06）19世紀の後半から20世紀初頭にかけてのころ。

スラーム主義」です。

イスラームの教えでは、中世に成立した『クルアーン』の教えを“神の言葉”として永久に一言一句紛うことなく守りつづけなければなりません。

しかし、「近代化」するとなれば、『クルアーン』の教えに反することも実行しなければなりませんから、「近代化」に着手しようとした途端、たちまち^{ウラマー}（*08）たちの猛反発を受けてしまいます。

そればかりか、これまでのイスラーム的な風習・価値観・行動様式・制度・政治理念など、伝統的な社会にもメスを入れなければなりません。庶民というものは従来の生活環境が変わることに嫌悪感・反発心を感じるもので、これが抵抗勢力となっていきます。

いわば、「近代化とイスラーム」は“水と油”。

ケマル＝パシャがトルコの近代化を成し遂げようと思うなら、まずは社会の隅々にまで浸透している“イスラーム的なもの”を片端から排除していかなければなりません。

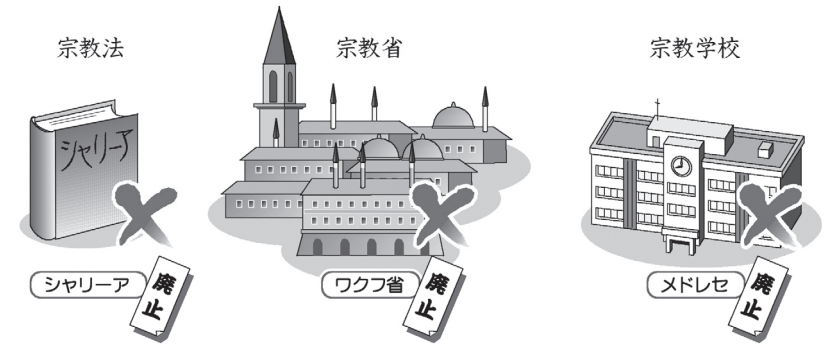
そこで1924年、その手始めとして政治・教育・法をイスラームから切り離すことを実施します。

- ・ 宗教法（*09）の廃止（イスラームと法制の分離）（A-1）
- ・ ワクフ省（*10）の廃止（イスラームと政治の分離）（A-2）（*11）
- ・ 神学校（*12）の廃止（イスラームと教育の分離）（A-2/3）

こうして、宗教権力が政治にも教育にも法律にも口出しさせないようにしておいたうえで、以下のような条項を骨子とする「近代憲法（トルコ共和国憲法）（B-1）」を制定します。

（*07）トルコ人には、日本人とトルコ人は「アジア大陸の奥地に現れた共通の祖先から東西に分かれた同祖民」という認識があります。

（*08）イスラーム法（シャリーア）を研究する学者。法学校を出たあとは、学校（マドラサ）の教師、裁判官（カーディ）、キリスト教であれば神父がこなすような仕事（モスクの管理・説教・クルアーン読誦など）をして生計を立てている。



- ・ 基本理念：主権在民
- ・ 立法府：議会制度（一院制）
- ・ 行政府：大統領制
- ・ 国家宗教：イスラーム（B-1/2）

この時点（1924年）では宗教勢力に気兼ねして「国家の宗教はイスラームである」という条項が付けられていましたが、それも4年後（28年）には削除され（B/C-2）、さらに37年には「世俗主義」が明文化され（C-2）、段階的に「脱イスラーム」が進んでいくこととなります。

さらに改革のメスはファッションにも及び、翌25年には「帽子法（C-2）」が制定され、「トルコ帽（フェズ）（C/D-2）」が禁止されました。

「たかが帽子」という勿れ。

これには重要な意味があり、その昔（1644年）、中国（清朝）で発せられた

（*09）イスラーム世界には、イスラームの教えから導き出された「宗教法（シャリーア）」と、政府が統治の必要性から制定した「世俗法（カーヌーン）」の2系統の法律がありました。

（*10）イスラーム社会では貧しい者を扶ける行為が大きく3つあり、救貧税を「ザカート」、個人的寄付を「サダカ」、慈善事業・基金などを「ワクフ」といいますが、このうちワクフを司る省庁のこと。